

5150-1
A-5-7-1
口 供

私ハ、艦載番號一五二八・四「DENIS MARSHAL」
テス。現在「ウォルファード・ヘムブトン」附近ノ「
コスフォード」ニ駐屯致シ居リ、本艦地ヘ「サレ
イ・ド・キング・テヨ・クビット・テラス・十五」
テアリマス。宣誓シテ次ノ陳述ヲ致シマス。

一九四四年九月九日午後、英蘭混成俘虜部隊ハ
私、「G. CRAWFORD」ヘ、マロス丸船中ニ
テ死亡ス。蘭印軍醫大尉「VANDER LOO」及ビ、
蘭印軍醫大尉「BRYAN」ヲ含メテ、総数一五〇
名アツタ。此ノ俘虜部隊ハ、二名ノ蘭印軍將校
以外ハ、全員ガオナリノ病状ヲ示シテ居タ。實際
大勢數ノ者ハ脚氣テ身體ガ痺レテ居タ。俘虜部隊
ハ、南緯三度四〇分東經一二八度三五分ニ位スル
「アンボン島」若クハ「アンボイナ」群島ノ「ア
ンボイナ町」テ日本ノ小貨物船ニ乗ツタ。一九四
四年九月十六日、セレベス島「ラハモエナ」ニ
到着シ、「カイス丸」ト云フ六〇〇噸ノ日本船ニ
乗リ渡ヘタ。

俘虜部隊ノ管理ニ當ツタ上級日本人ハ栗島中尉
(原文ハ「クレシエマ」トアリーテ、日本人宣誓
森下鮮人通譯笠岡之ヲ行佐シ、約六名ノ鮮人衛
兵ガツイテ居タ)。

水ハ一日二回給與サレ、ソノ全量ハ二分、一
バイントーテアツタ。食物ハ、一日二回給與サレ
ソノ全量ハ一〇〇瓦(三・五オンス)ノ米粥テ、
其他ニハ何モ與ヘラレナカツタ。

俘虜六、全然救命缶ガナク、又其他ノ救命裝備
モ皆無アツタ。

一燈シカナイ船側附ケノ「ボート」ハ、駆海ニ
四人ヲ收容シ得ルニ過ギナイ小ボートアリ、倭
ト云ヘル程ノモノハ全然無カツタ。

消火設備

船中ニ於ケル日常生活狀態ハ極メテ悪ク、俘虜
ノ中幾人カハ割當テラレタ場所ニ無理ニモ入り込
ム事カ出來ズ甲板ニ出テ行シタ爲ニ、ソノ俘虜達
ハ皆、森立舊カラ威懾スペキ殴打ヲ蒙ツタノア
ル。

「カイス丸」ニシテ船シテカラ、其船ハ我々俘虜
ガ以前ニ「アンボイナー」ニ於テ、爆弾・弾薬・石
油・米及ビ類々ノ食糧ヲ積ミ込ンダ同一ノ船ア
リ、此ノ船荷ハ皆入口ニ扉ノアル船艤ニ適當ニ片
附ケラレテ居ル事ガ判ツタ。

サテ、我々俘虜ノ居所ハ、此ノ昇降口ノ最上部ニアリ、日本兵ハ日光遮蔽用トシテ一次ノ小陰布ヲ支給シテ吳レタケレドモ此ノ布ハ全ク不適當ナモノテ大部分ノ俘虜ハ、極テ、余儀ナク太陽ノ直射ヲ浴セホバナラナカツタ。最初ノ二十四時間ハ、我々ハ少シニ飲料ヲ與ヘラレナカツタノテ此ノ状態ハ更ニ悪化シタ。更ニ船ハ石油臭紛々タル鋼鐵船デカテ、加ヘテソノ位置ハ赤道直下ニ在ツタノアル。

給水状態ハ、第三日目ニハ幾分良クナリ、二十四時間ニ各俘虜ハ六ヨン二分ノ一「ペイント」與ヘラレタ。

食物ハ一日一食テ米五十瓦テアツタ。我々ガ船館ニ食糧ノアル事ヲ知ツテキタノテ日本兵ハ此ノ不足ナ食糧給與ニ就イテハ何等説明ヲシナカツタ。又日本兵ハイツモ船内カラ米袋ヤ乾燥野菜籠附ノ箱ヲ持ツテ行ツテ、沿岸ノ土人相手ニ鷄卵・果實・鮮肉其他ノ物品ト交換シテキタ。

俘虜達ハ、例ノ如ク救命帶モシクハ其他ノ救命裝備ヲ何モ持ツテキナカツタガ、日本兵ヤ鮮人兵ハ夫々自分自身ノ救命ヲ持ツテナカツガ

船備附ケノ唯一ノボートヘ駆逐ニ六人ヲ収容シ
得ルダケメ小ボートテアツタ。

消防設備

醫用品一箱。少クトモ俘虜ニハ何ニモ又
給サレナカツタ故々ハ自分達ガ携行シテキタ屬急
醫用品ノ入ツタ極メテ小サイ箱ヲ持シテキタガ
風物ノ藥品ハ全ク無カツタノテアル。

三人ノ俘虜ガ飢渴ノ爲ニ死亡シタノテ、第三日
自殺々ハ日本兵ニセット食餉ト水トヲ贈シテ吳レ
ト願シダガ、彼等ノ返答ハ、若シ我々怪擲ノ間
テ、金ツ都合スルナラバ沿岸ニ行キ我々ガ食糧
入ノ爲ニ都合シタ金額ニ屬シテ食糧ヲ購入シテ來
ヤウト云フ事アツタ。日本兵ヘ、一回七人ノ俘
虜部隊ノ隠出ニ對シ、マサシクニ匹ノ山羊ト、各
人ニ四本ノ青イバナナードヲ持ツテ餉ツタ。然シ
シソノニ匹ノ山羊ヘ、全然我々ノ爲ニナラナカツタ
トイフノハ、ソノ食糧ヘ豆分万至十分位ノウチニ
海中ニ吐出サレル程我々ノ間ノ具合ハ悪カツタカ
ラアル。

全俘虜ヘ起立スレバ勿體殴打サレルノアルガ
今ヤ這フ事モ出來ナイ運ハク可キ悪化シタ状態ニ
アツタノテ、森立前ヘ此ノ船中ニ於テハシノ屋待

振リテ 爆轟スル機會ガ少シモナカツタ。

此ノ船ヘ、或小島嶼沖ニ錨泊シテキタガ、九月二十日午後二時ニ至リ聯合國側四發リベレイタ！
機カ我々ヲ攻撃シ、船ヘ火災ヲ生ジタ。

日本人眞首藤、併人煙山（原文ニヘ「カシアマ」トアリ）及ビ、併人衛兵達ハ直チニ船ヲ見棄テタ。

日本人船長ハ船ハ船荷ノ性質ニ由リ彼分間テ爆轟スル事ヲ指摘シテ、私ニ俘虜全員ヲ離船サセルヤウ命ジタ。日本人栗島中尉（原文ハ「クレシェマードアリ」ヘ私ニ同様ノ命ヲ與ヘテ何故迅速ヲ要スルカ説明シタ。ソレカラ日本兵ハ船ヲ放棄シ私ヲ空シテ獨リテソノ作業ヲサタ。モウ一人ノ英人將校即ち「G. CRANFORD」ハ完全ニ身體ノ自由ガ利カナカツタ、且ツ二人ノ和蘭人將校モ亦既ニ船ヲ見棄テ入艦船シテ居タ。然シ乍ラ、私ハ九名ノ生命ヲ失ツタノミテ、全俘虜ヲ冒ク離船サセル事ニ成功シタ。放命作業ヲ終ルノニ約一時間乃至一時間半カカツタ、カクテ船ヘ遂ニ爆轟シ、完全ニ委フ消シテ了シタ。

日本兵ヘ、結局我々ヲ「ラヘ・モエナ」ニ運行シ一昼夜假宿舎ニ宿泊シタ。

殆ド傷ベテノ俘虜ハ裸體アツタ。日本兵ハ、衣料ヤ毛布ヲ支給スルタメニ骨折ラウトモシナハツタ。我々ヘ陸上ニ幾多ノ日本軍医ア見タシ、日本ハ支給品モ亦在ツタニ遇ヒナイノダケレド。

其ノ陸上ニ居タ二十四時間ニ支給サレタ食物量ヘ、各々七五瓦ノ握飯二個ト小サイ餌一匹アリ。同期間ニ於ケル水ノ供給量ハ一人・二分ノ一「ペイント」アツタ。

私ハ、栗島中尉（原文ニハ「クレシェマ」トアリード森官首ニ、モット水ト食物ヲ増ヤシ、何等ノアリ。衣料及ビ毛布ヲ夫々支給シ與レルヤウ願ツタガ、何一つ支給サレナカツタ。

負傷者ハ當地ノ病院ヲ管轄ノ「BRYAN」軍醫カラ應急治療ヲ受ケタ。

一九四四年九月二十一日ノ夕刻、我々全員一三八名ノ俘虜ト栗島中尉（原文ニハ「クレシェマ」トアリ）森官首笠間反ヒ隼人衛兵連ヘ日本船「アロス丸」ニ乗船シタ。